

アフリカの人々と名付け 10

牛の略奪者を讃えてー

『牛の民』キプシギスの詩名

小馬 徹

今回は、ケニアの南ナイル語系農牧民キプシギス人の誇らかな詩名を取り上げる。キプシギスの詩名は、或る人物の勲功を讃える詩の冒頭の語句を取って作られた。オートボルタのモシ人の同様の事例との異同が興味深い。比較と分析を試みる前に、まず、幾つかの詩名とその元になった詩を眺めてみよう。

楯の音高く響かせし者

私の知るところでは、「楯の音高く響かせし者」という詩名は、次の詩から出ている。

「楯の音高く響き／かの牛牧キャンプにありし彼の母御、その音を聞いて曰く／あの楯を音高くうち響かせる者こそ、我が目の睫毛／幾本もの丈高き竹を引き抜き引き抜きて／天を摩す竹林を抜けてぞ来るや／ムクルへ移りて行きしかの白人ども／彼らが見捨てたるかの土地を抜けて」（筆者の自由訳）。

誰か戦士が、遠くから楯を打ちならしつ、略奪した牛を追って帰館して来る。一人の母親が、それを聞きつけて、彼こそが自分の息子であると確信し、胸一杯の喜びを声高く歌いあげる。その様を歌った詩である。

穴に祈りし者

「穴に祈りし者よ／流れの淵の深みなす水穴に祈りし者」という詩からは、「穴に祈りし者よ」という詩名が作られた。

キプシギスの戦士たちは、敵地から略奪した家畜を追いつつ帰館する途次、しばしば川に行きあってしまった。ケニアの川は、日頃は大概水位が低いけれど、一旦上流で雨が降るとたちまちの内に激流と化してしまう。

そんな時、キプシギスの戦士たちは、追手の足音に耳を澄ましなが、聖なる芝草の流れに投げ入れて、「川よ二つに割れよ、そして我を通し、速やかにまた一つになれよかし」と祈ったのである——因みに、キプシギス語の遠い起源がナイル川流域にあると考えられるのだが、キリスト教徒の或る者たちは川に祈る伝統的なキプシギスの慣行をモーゼの故事に譬え、遠い先祖がエジプトにいた証拠だと主張する。

牛をもぎ取りし者

次に、「青灰色の口をした牛をもぎ取りし者」という詩名の元歌を見てみよう。

「青灰色の口をした牛をもぎ取りし者よ／姻戚のものなる牛をもぎ取りし者よ／アラップ・カルラの牛を」。

或る戦士が、敵地から口の回りの毛が青味がかった灰色をしている雌牛を奪って帰った。戦士（またはその家族の一人）が、その牛の産んだ牛たちを婚資としてアラップ・カルラの家を娘を妻にした。上の詩は、家が繁栄する礎を築いたこの戦士の勲功を誇りにとし、家の誉れとして讃えているのである。

自分の村の隊列を見限りし者

「自分の村の隊列を見限りし者」という詩名には、元になった幾つかの詩がある。今ここでは、その一つの版を紹介したい。

「自分の村の隊列を見限りし者よ／そしてアラップ・インデリの率いし大軍に加わりし者よ／かくて次にアラップ・マガガンの軍勢に加わりし者よ」。

「自分の村の隊列を見限りし者」とは、卑怯者の事では少しもない。防衛戦では村が打って一丸となるが、攻撃戦と略奪戦ではあくまでも個人の自発的な意志を優先する。それが、無頭的な平等社会を生きるキプシギスの戦い方なのである。戦士長は個人の能力によって選ばれ、世襲されず、彼の権威もその場限りのものだった。戦士長は、巧みな話術で予備的な勝利を戦士たちにイメージとして経験させて心を高揚させ、付き従う戦士を確保したのである。

この詩は、自分の村の戦士長の優柔不断を詰り、積極的に勇猛な戦士長を訪ね求め、首尾よく家畜を略奪した戦士を讃えている。

「牛の民」キプシギス

以上に見た詩名は全て、他民族から牛を略奪して来た戦士を何よりの誇りとし、彼を讃えている。幾分煩瑣でも、少し民族誌的な事実に触れて、背景を明らかにしておきたい。

キプシギス人は、今日ではトウモロコシを自給栽培するが、伝統的には牛の乳と血と僅かな雑穀を主食とする牛牧民だった。彼らは、今でも牛をあらゆる価値の中核とする「牛複合」文化をよく維持している。

牛は食料を提供するだけでなく、衣類と日常雑貨の主要な材料であり、また保存できる唯一の財産だった。今でも、婚資としては9頭の牛を、また血償としては、殺人者の氏族が被害者の氏族に10頭の牛を支払う。

また、牛は上（神）と下（人間）2つの世界の仲介者であり、牛を犠牲に捧げることは2つの世界の調和を図る最善の宗教的行為である。牛の食物（草、水）、身体（肉、皮、角、骨）、生産物とその加工物（乳、血、バター）、ならびに排泄物（糞、尿）は、聖なる価値を持ち、儀礼に多用されている。

更に、キプシギスの牛には驚異的な程に多種多様な毛色と紋様が見られるが、光のスペ

クトルに基づく色ではなく、牛の色模様こそが森羅万象を分類する範疇の基盤である。

加えて、例えば人間の性と成長段階による区分がより複雑な牛のそうした区分に準拠するなど、牛の様々な様態に因む語彙や言い回しがキプシギス語の表現の骨格を成している。

つまり、キプシギスでは、経済、社会、宗教、言語のいずれの次元でも、牛が最も重要なコミュニケーションの媒体であった。

牛の略奪を誇る詩名

キプシギスの政治構造の核は、広大な民族の領土を横断して、ほぼ15年ごとに形成される年齢組（age-set）である。しかも、その実質的な機能は、統合された民族社会を実現し、民族全体を糾合する強力な軍団を組織する事にあったと考えてよい。

だから、生活空間がごく狭い氏族の領土の内部に限られ、氏族同士が相争うバントゥ語系のグシイ人・ルイア諸民族や、西ナイル語系のルオ人などの近隣の農耕民に対しては、ほぼ一方的に家畜の略奪者であり続けた。

ただ、やはり軍事性の強い年齢組をもつ東ナイル語系の牛牧民マサイ人は、常に手強いライバルだった。キプシギスとマサイは、厳格な戦いの作法と規約を作り、いわば相互の牛をトロフィとして、まるでスポーツを楽しむように戦い合ったと伝えられる [Or char-dson, I. Q. The Kipsigis, 1961]。

キプシギス人にとっては、一人でも多くの妻をもち、なるだけ沢山の子供を得ることが、誇りと威信の源泉であった。少年たちは、一日も早く自分たちの年齢組が開かれて戦士となり、他民族から略奪した牛を婚資として妻を迎える日を夢見て来た。そして、それは家族全員の切なる願いでもあった。彼らの詩は、何よりも戦士の勇気と智略を、そして略奪した牛を誇りとし、褒め讃えるのである。

（こんま とおる 神奈川大学社会人類学）